

九州和牛に関する研究

第2報 和牛の飼養増加に関する経営的考察

—特に農業収入に関する牛馬の差異について—

(概要)

川 関 巖・沢辺 恵外雄

九州農業試験場

KAWASEKI, I. & SAWABE, E. Studies on the Native Cattle in Kyusyu
 II. Significance of the Native Cattle from Farm-economic
 Viewpoint (Summary)

I. 研究の課題と対象

我が国における役肉用牛の飼養は、頭数・戸数共に古くから漸増の傾向にあり、戦後特に顕著である。九州においても、この傾向は平坦地帯における飼養増加として、かなり強く現われ、内容的には、和牛飼養立地の移動、牛馬の交替といえる。和牛飼養に関するこのような現象は、勿論、経営主体たる農家によつて遂行され、基本的には、農業経営の合理化・生産過程において、(1)労働手段として労働生産性の向上に寄与し、(2)仔畜、肉、厩肥等の生産を通じて農業収入の増大に貢献するの一の方法として行われるべきものであり、その観点から経営における和牛存在の合理性を検討しなければならない。

このような考えのもとに、牛馬交替現象が、かなり明確な(第1表)熊本県の平坦地帯、菊池郡西合志村弘生部落について調査したが、本稿では紙数の都合上、特に和牛が直接農業収入の増大に関係する役割だけについて、和牛又は馬を1頭飼養する農家各1戸の事例に基づいて、馬と対比しながら極く概略を摘記する。

第1表 弘生部落の牛馬飼養頭数

年次 牛馬別	昭								
	19	20	21	22	23	24	25	26	27
和牛	1	3	3	4	4	6	11	11	12
馬	16	12	13	13	14	15	15	15	15

II. 経営経済における和牛と馬

1. 生産物回流面から。

和牛あるいは馬が、経営において農業収入の増大に関係する役割は、先づ経営生産物の回流過程を通じて

行われる。すなわち、養畜の効果の一つは、経営の無市価生産物の有効利用にあるといわれているが、これが牛馬によつて如何に果されているかを見なければならぬ。そこで、和牛と馬の夫々について経営生産物中の飼料仕向割合を見れば(第2表)和牛農家では甘藷の若干部分が飼料として仕向けられ、副産物はその大部分が和牛の飼料あるいは敷料に向けられている。他方、馬飼養農家では、主産物の飼料仕向割合が高く、殊に厩米、麦類などの主穀が飼料に用いられる反面、副産物については糠類を除いて飼料仕向割合は、和牛の場合より相当低くなつてゐる。次に、これを給与飼料の構成内容から見れば、牛馬共に野草の割合は圧倒的に高いが、その経営的意義は別として、生産物の仕向に現れた利用方式が、ほとんど軌を一にして飼料構成の内容となつていて、和牛における副産物類、馬における穀類の割合が目すべきものである。

第2表 飼料構造(%)

項目 牛馬別 種類	総生産量中の 飼料仕向割合		飼料給與量中の 構成割合 (T. D. N)	
	和牛	馬	和牛	馬
米 麦 類	—	7.0	—	7.1
雜 穀 豆 類	—	8.2	—	1.3
甘 藷 諸 類	8.1	9.4	1.2	1.8
糠 穀 類	95.8	100	9.0	4.9
調整殘滓類	95.0	14.5	8.9	0.9
藁 菜 稈 類	43.1	35.8	35.6	27.7
青 刈 類	100	100	0.8	1.3
生 野 草	44.0	89.0	44.5	55.0
合 計	—	—	100	100

以上の点から考えられることは、経営が養畜に期待する大きな効果の一つである経営副産物の有効化については、和牛が、より優れており、馬は主穀を要求することによつて農業収入を低くからしめる性格をもつ

ているということであろう。

2. 飼養所得について。

農業収入に最も重大、かつ直接的な影響をもたらすものは、言うまでもなく牛馬飼養による直接的な所得の大きさである。そこで、牛馬夫々の飼養所得を見れば(第3表)粗所得では和牛の場合に多く、これに対する失費は殆んど同程度、若くは和牛が多少低くなる傾向をもっている。更に、仮に自給飼料中販売性能をもつ主産物の見積額を失費に加えるとすれば、飼

第3表 飼養所得 (千円)

項目		牛馬別	和牛	馬
粗所得	仔畜販賣額		23.0	17.5
	母畜増殖額		—	—
	計		23.0	17.5
所得的失費	飼種衛生共母計		0.2	0.4
	料付管理費		1.0	1.0
	衛生管理費		0.9	0.5
	共母衛生費		0.2	0.6
	衛生共母計		3.7	4.0
	計		6.0	6.5
飼養所得 (A)			17.0	11.0
自給飼料見積額 (B)			0.3	5.5
(A) - (B)			16.7	5.5

養収益は和牛に、ますます高くなる。また、このような飼養所得が、夫々の経営の農業所得全体の中に占める地位は(第4表)和牛が高い割合を占め、馬のそれより重要な地位にあると言えよう。更に問題を現金収入面だけに限ってみれば、和牛農家では総現金収入の

第4表 農業所得・現金収入における牛馬の地位 (千円)

牛馬別	項目	農業所得総額 A	飼養所得 B	現金収入総額		b/a	
				B/A	a		b
和牛		132	17	12.8%	85	23	27.0%
馬		148	11	7.5%	147	18	11.9%

27%を和牛に仰いでいるが、馬では約12%に過ぎず、和牛が小経営の有力な収入源であることが認められる。

以上は、たまたま昭和26年9月から翌年8月の1和年間を区切つての計算結果であるが、牛馬が経営に供与する上述のような収入機会には一般に相当の開きがあり、和牛の有利性が、ますます高くなっている。すなわち、弘生部落に飼養される牛馬成牝全部について

過去8年間の実績から見れば、生産率、育成率、及び平均1年当りの成牝1頭に附与される収入額共に和牛が絶対的な優位を示している(第5表)生産率と和牛に劣る馬は、駒販売までの育成中に負う危険が多く、

第5表 仔畜の生産・育成及び収入における牛馬の差異

牛馬別	項目	成牝頭数	生産頭数	育成頭数	生産率	育成率	仔畜1頭平均価格	成牝1頭当年収入額
		A	B	C	B/A	C/B	D	D·C/A
和牛		53	16	16	30.2%	100%	千円 25.2	川 7,616
馬		108	8	5	7.4%	62.5%	20.6	953

(註) A, B, Cは昭20—27年の延頭数, Dは最近3ヶ年の平均。

従つて育成率は低く、加うるに最近の犂と駒の価格差は実質的な平均収入における馬の地位をいよいよ下げていく。試みに成牝1頭当りの年当収入額として算出してみれば、和牛の7000円に対して馬は僅か900円余に止まつている。

III 結 び

牛馬飼養が農業経営に果たす効用の中、農業収入の増大という部分については、和牛の有利性が認められたと思う。和牛飼養のこのような効果は、特に小農の歓迎するところであり、ここに専用役畜の性格の馬が、用役兼備的な和牛によつて駆逐された理由の大部分が潜んでいると思われる。それは、戦後における和牛の飼養増加が、小経営による1頭飼養として普及してきた統計的事実が裏付けているところである。

このような和牛の飼養は、小農経営有畜化の方途として一応合理的なものに相違ないが、それは小農が経済事情の変動に対して行う単なる適応の仕方であり、従つてまた、その限りにおける経営の合理化方式であるといえよう。

このように牛馬の交替、和牛の新たな導入飼養が、限られた範囲においてながらも経営の合理化に有効であるとしても、この地帯においては、和牛の飼養そのものに、なお検討を要する多くの技術的な問題一例えば、資質の向上、生産率の向上等一が残されていることを指摘しなければならぬ。と同時に、経営組織のこのような方向づけは、経営合理化の上に考慮すべきものを含んでいる。何となれば、馬から和牛への転換は経済的には、専用役畜の兼用化の方向であり、それ自身経営における労働生産力の低下、または停滞、膠着を意味するものと考えられるからである。